

平成28年度鍼灸等研究費研究成果 要約

研究課題名	「鍼灸師・マッサージ師」のための痛み学習の習得状況に関する評価システムの開発
班長 氏名/所属機関	伊藤 和憲/明治国際医療大学 鍼灸学部
班員 氏名/所属機関	佐原俊作/京都府立視力障害者センター・講師 佐藤智樹/国立リハビリテーションセンター 浅井福太郎/九州看護福祉大学・助教 梅村勇介/名古屋医健スポーツ専門学校・講師 宮本直/明治東洋医学院専門学校 蘆原恵子/明治東洋医学院専門学校 齊藤真吾/平成医療専門学校・講師 内藤由規/平成医療専門学校・講師 皆川陽一/帝京平成大学・助教
成果	はり師、きゅう師、あんま・指圧・マッサージ師のための痛み学習テキスト
1. 目的	<p>はり師、きゅう師、あんま・指圧・マッサージ師が療養費の給付が認められている疾患はすべて痛みに関する疾患であり、尚かつ慢性化しやすい疾患である。特に、近年急性痛と慢性痛の対応は大きく異なることが知られるようになったが、学校教育の中では「痛み」を切り口には教えられていない。</p> <p>そこで、はり師、きゅう師、あんま・指圧・マッサージ師が痛みの知識をどの程度持つのかを評価するとともに、それを補足するための学習教材を開発することにある。</p>
2. 内容	<p>痛みの学習状況を確認するための評価として、①痛みのメカニズム、②痛みの診断・診察、③痛みの治療の3セクションに分け、各10問ずつの計30問作成し、鍼灸学校の学生、鍼灸師（既卒者）、理学療法士（既卒者）の3群（各群100名程度）でレベルを検討した。鍼灸学生の正答率は50.1±24.5%、鍼灸師56.7±23.5%、理学療法士58.8±24.8%であり、学生と鍼灸師の間に点数の開きは存在しなかった。このことは、卒業以降新しい知識が増えていない可能性が示唆された。また、セクションごとの結果では、セクション1の正解率は、鍼灸学生52.4%、鍼灸師58.4%、理学療法士63.6%、セクション2の正解率は、鍼灸学生48.3%、鍼灸師58.4%、理学療法士63.3%、セクション3の正解率は、鍼灸学生49.6%、鍼灸師53.1%、理学療法士49.4%と、鍼灸師向けに作成した問題であるにもかかわらず、痛みのメカニズムや診断・診察内容に関しては理学療法士の方が5%ほど高い点数を示しており、鍼灸師のメカニズムや病態把握能力は若干劣っていると思われる。</p> <p>一方、鍼灸師向けに昨年度作成した痛みテキストをベースに作成したスライドで講義を行い、講義前後で点数を比較したところ、講義前48.7±25.6%であった</p>

	<p>点数が、講義後 77.6±16.8%まで上昇し、各セクションの正解率ではセクション1が46.0%から76.6%、セクション2が51.3%から78.9%、セクション3が48.9%から77.2%と各分野とも改善が認められた。特に改善に認められた項目は、問3：発痛物質、問4：痛みの増強に関与する受容体、問10：DNIC、問14：痛みの評価、問20：全身の痛み、問22：アデノシンA1受容体、問27：薬剤、問29：痛みの治療法など、痛みに治療では必要な内容でも、はりきゆう理論、東洋医学臨床論、臨床医学各論、臨床医学総論においては学習されていない項目であった。</p>
<p>3. 成果/考察</p>	<p>鍼灸師の痛みに関する知識は、理学療法士などと比べても低いものではないが、学生と既卒者の間に差は認められないことから、学校で教育された内容以外に痛みの知識は増えていないことが明らかとなった。また、正解率が低い項目は、痛みの診療では必要と思われる知識でも、学校教育では学習しない内容であり、卒業後に知識のアップデートが行えていないことも明らかとなった。しかし、痛みに関する講義を行い、痛みに関する情報を加えていくと、講義前後では点数が20%以上上昇し、理解度が増していた。</p> <p>昨今、痛みの研究は急速に進んでおり、痛みの診断や治療は大きく変化している。その意味で、療養費が取り扱われる疾患に関しても痛みが中心であることから、鍼灸師は痛みを正しく理解し、最新情報を入手することが正しい療養費の取り扱いにつながるものと考え、医師との連携もスムーズに行えるものと考えられる。しかし、慢性痛患者と向き合っていくためには、知識以外にも診察・治療技術や医療面接力など求められており、今後は診察・治療技術の向上をどのように教育していくかが大きな課題である。</p>